

〔書評〕

宇佐川智美著『海の匂ひ』

小野美典

生きてゐたぬくもりを木は残しつつベンチとなりて人を迎ふる

(I 椋鳥)

脱臼の右手に筆をくくりつけ描きしといへるルノアールの絵

(I 海の匂ひ)

深海に続きゆきたる隧道の闇に響けり蟋蟀の声

(II 螢)

父なき子子なき男にぶらさがりナマケモノのごと揺られてゆけり

(III ナマケモノ)

水の辺に人憩ふときさやさと風は言葉を語りはじむる

(IV 水の辺)

本学会会員の宇佐川智美さんが、第二歌集『海の匂ひ』を上梓された。

同書の「あとがき」によると、本歌集には、第一歌集『光のかたち』以降の、一九九八年春から二〇〇五年夏までの自選歌三四二首が収められている。そのうち、I (椋鳥)「海の匂ひ」は、二〇〇五年度「未来」力作賞受賞の歌。II 以降は、ほぼ年代順に歌を配列したとのことである。

近現代文学を専攻しなかつた僕が、宇佐川さんの歌集に論評を試

みるというのは、おこがましい限りであるが、全くの素人の僕が宇佐川さんの歌をどのように読み、どのように感じたか……。思い違い・解釈違いも多々あるうかと思うが、素朴な感想を述べることによつて、僕の責務を果たさせていただきたいと思う。

第一歌集『光のかたち』については、『山口国文』第23号(平成12年3月)の「会員消息」で、「透明にして柔らかな歌は魅力的で、作者の人柄と思われます」と紹介されている。署名はないが、当時学会委員をしていた僕の記憶が確かであれば、今は亡き石井大先生の手書されたものである。それから、ほぼ七年。石井先生の的確に評された宇佐川さんの歌は、その根幹に「透明にして柔らかな」ものを持ちつつ、それが発展・変容して枝葉となつて繁り、とても大きくてうつつそうと茂つた大木へと成長したように感じられる。その樹木は、夏の鋭い日ざしが降り注ぐ時には(今年は特に暑かつた)、人々を木陰で休ませ、なごませてくれるものである。一方、月の冴えわたる夜には、不気味な影を足元に落とし、近寄りがたいものでもあるだろう。僕は、宇佐川さんの歌集から、全く異なる二つの側面——しかし、どこまでも同じ一本の大きな樹木——を感じ取つ

た。これが、率直な僕の感想である。

石井先生が言われた「透明にして柔らかな」もの。それは、人間はもちろんのこと、生きとし生けるもの全ての持つ、暖かで優しいぬくもりへの共感であろうか。本歌集には、そうした「ぬくもり・暖かさ」を詠んだ歌が多数見られる。それらは、読む者の心をも優しく暖かささせてくれる。

冒頭に挙げた一首目「生きてゐた」は、そうした優しさを、ベンチにまで感じ取った歌である。硬質のプラスチックで出来たベンチにはないぬくもり……。生きていた木であるがゆえのぬくもり……。石井先生が言われた「作者の人柄」ゆえの歌であろうか。心安らぐ歌である。五首目「水の辺」の歌。時間に追われて醒醒と暮らす僕たち現代人が、水辺で憩うひと時、初めて風の語りかける言葉に気づく。優しい心を取り戻した瞬間、自然の優しさにはと気づかされることを詠んだ歌か。この歌も、読む者の心に安らぎを与えてくれる。

歌集には、こうした優しく暖かな歌だけでなく、一見すると不気味な暗黒の世界を感じさせる歌も登場する。

三首目「深海」などは、そうした歌。深夜のトンネルであろうか……。底知れぬ暗闇の更に先に、宇佐川さんは、深海を看着取っている。誰しもが経験する感覚かもしれないが、トンネルの闇を深海につなげたところには驚かされる。そして宇佐川さんは、無機質な隧道の闇の中に、コロコロコロと鳴く蟋蟀こおろぎの声を聞いている。暗い闇の中に見出した、生き物のぬくもりとでも言えようか……

宇佐川さんの歌の中に時々現れる、こうした不気味な暗黒の闇を感じさせる歌は、宇佐川さんにとっては、前述のぬくもり・暖かさ

の反転なのかもしれない。宇佐川さんの五感の感じ取る世界が、暗黒であれば暗黒であるほど、暖かなもの・優しいものにすがりたくなってくる。そうした思いが、トンネルの闇に蟋蟀の声を登場させることとなったのであろうか。

四首目「父なき子」は、歌集の帯にも記された歌である。それだけ、宇佐川さんの深い思い入れが窺われる歌である。自らの置かれている立場を冷徹に見つめた時、「ぶらさがり」という表現が登場したのであろう。僕は当初、この歌を読んだ時には、自己を冷たく突き放した作者の詠みぶりに、恐ろしさすら感じた。しかし、今回再度よく読んで考えてみると、下の句には、現実には抵抗せずユラリユラリと揺れながら生きて行く姿も感じ取れる。大学・大学院時代と森鷗外研究をされた宇佐川さんの識域下には、鷗外流の「*caution*（諦観）」が流れていると考えるのは、穿ち過ぎであらうか。

わたくし事となって恐縮だが、宇佐川さんと僕との最初の出会いは、僕が大学二年生になって、国語国文学研究室に入った時だった。一つ上の学年に、宇佐川さんがいらっしやっただのである。大学の専門の授業がどんなものやら全然わからなかった二年生の春、初めて発表の手ほどきをして下さったのが、宇佐川さんだった。三年生は宇佐川さんだけ。そこに僕たち新二年生が三人加わって、作品分析をし、発表のレジュメを作っていく。作品は、鷗外の「青年」だった。四人が集まって、深夜の一時・二時頃まで（チームによっては明け方まで頑張っていた）、作品の分析・検討をおこなう。時には話が脱線して、各自の人生観・価値観をぶつけ合うこともあった。大学での演習発表の醍醐味でもあろう。

『青年』第五章に出て来るセガンティーニの絵の場面では、「これぞ鴉外が理想とした生き方、真の芸術家の姿」といったような発言が、宇佐川さんの口から出たように記憶している（なにぶん昔の話なので、記憶違いだったらご寛恕のほど）。

あけたところには、セガンチニの死ぬるところが書いてある。

冰山を隣に持った小屋のような田舎屋である。ろくな暖炉もない。そこで画家は死に瀕している。からだのうちの臓器はもう運転をどめようとしているのに、画家は窓を開けさせて、氷

山の頂にたなびく雲を眺めている。（『青年』第五章）

死に瀕しても、なお自分の理想とするアルプスの山々に目を向けている。同じような画家の高邁な生き方に、宇佐川さんは共感されたのだろうか、冒頭に挙げた二首目「脱臼の」は、必死に生き行こうとする——自らの芸術家としての道を生きる——ルノアールに共感した宇佐川さんの思いが吐露されているように、僕には感じられる。

セガンティーニの分析に続いて、宇佐川さんは、自らの思う鴉外論の一端を僕たちに示してくれた。宇佐川さんは、鴉外を知るなら『妄想』を早く読む必要があると。そして、人生の最晩年に差し掛かった翁が、自らの閱歴を振り返り、それでもなお浜辺に立つて、はるかかなたの太平洋に目を向けている場面の重要性を力説された。

その翁の過去の記憶が、まれに長い鎖のように、刹那の間に何十年かのあとを見わたさせることがある。そういうときは翁の炯々たる目が大きくみはられて、遠い遠い海と空とに注がれている。（『妄想』）

『光のかたち』『海の匂ひ』のあとがきで、宇佐川さんは、自らの

置かれて来た境遇をそれとなく記されている。僕は、歌集を通じてしか宇佐川さんと接点がないので、宇佐川さんの私生活は全く知らない。しかし、歌そのものと歌集のあとがきから窺われる私生活は、決して平坦なものではなかったようである。それらの閱歴を経て、今なお、自らの第三歌集に向けて進んでいかれている宇佐川さんは、まさに『妄想』の翁のようである。その目は、はるか彼方を見据えているのだろう。今から第三歌集が楽しみである。

冒頭で紹介したように、宇佐川さんは二〇〇五年度「未来」力作賞を受賞されている。着実に現代短歌史にその足跡を残して行かれている。大学時代の宇佐川さんの一面をここに書き記すことにより、今後の宇佐川智美論を考える上での手掛かりを与えたこととして、僕の独断による書評を終わらせていただく。妄言多謝。

〔宇佐川智美『海の匂ひ』ながらみ書房、二〇〇六年一〇月刊、

二千五百円〕